

# 開発的生徒指導による自己指導能力の育成に関する実践的研究

19053 伊藤 進

キーワード：生徒指導の三つの機能 相乗効果 リフレクション フィードバック

## 概要

平成 29 年告示の学習指導要領改訂の経緯に「予測困難な時代への対応」や「持続可能な社会の創造」が示され、社会構造の急激な変化で未来を予測することが難しい現状において、生徒が自らの価値と責任を自覚し、他者と協働しながら自己実現を図っていくことが求められている。本稿は、中学校における生徒指導の現状と課題を整理し、自己指導能力の育成を通して学校教育目標の具現化を図ることをねらいとした一考察である。生徒指導において目指すべき自己指導能力を明確にして、生徒指導の三つの機能を生かした「積極的な生徒指導の多面的展開」による生徒への支援とそれを支える若手教員を中心とした「自己指導能力の育成に向けた教員間の学び合い」について具体的な手立てを立案・実践、考察することによって、生徒指導の本質を改めて検討し、それを実践に生かすとともにその成果を検証したものである。

## I 研究の目的・ねらい

### 1 研究の背景

近年、情報化やグローバル化により社会構造が急激に変化し続けており、未来を予測することは困難な状況にある。このような社会でよりよく生きていくためには、生徒が自らの価値と責任を自覚し、他者と協働しながら自己実現を図っていくことが必要だと考える。このことは、OECD「Education2030」に示された近未来において子ども達に求められるコンピテンシー（新たな価値を創造する力、責任ある行動をとる力、対立やジレンマを克服する力）においても、その重要性が述べられている。しかし、文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（2019 年度）によれば、全国の小学校のいじめ認知件数は 425,844 件、中学校は 97,704 件、不登校児童生徒数も小学校では 44,841 人、中学校では 119,687 人といずれも過去最多になるなど、生徒指導等に関わる課題が複雑化・深刻化し、これまで多く行われてきた課題解決型生徒指導では対応しきれない現状となっている。また、教員の大量退職、大量採用の時代に入り、各学校に若手教員が増加している。勤務校においても、例年 1～3 名配属される初任者や 2 校目の若い教員が増えており、教員の若年化が進んでいる傾向にある。教科指導はもちろんのこと、生徒理解や教育相談など生徒指導に関する教育の質の低下を回避するための取組が喫緊の課題として挙げられ、教員が互いに学び合いながら生徒指導力の向上を図り、協働における取組の中で生徒の自己指導能力を育むことが重要と考える。

### 2 研究の目的

学校教育目標の具現化に向け、教員が互いに学び合い、協働における取組の中で生徒の自己指導能力を育む指導力を向上させる方策を探る。

### 3 研究の方法

#### (1) 自己指導能力の育成を図るための生徒指導の明確化

文献や先行研究、経験則から自己指導能力の育成を図る指導の在り方について整理する。

#### (2) 開発的生徒指導の実践に向けた具体策の提案

自己指導能力の育成に向けたコンプリヘンシブ・アプローチを提案する。

## II 研究の結果

### 1 自己指導能力について

#### (1) 自己指導能力の体系的把握

「生徒指導の機能と方法」（坂本 1990）において、「自己指導能力とは、その時、その場で、どのような行動が適切であるか自分で判断し、決定して実行する能力」と定義している。自己指導能力の育成にあたっては、学校生活それぞれの場面において、他者とのかかわりの中からどのような選択が適切であるか、自分で判断・実行していけるよう意図的に課題を設定したり、環境を整えたりする開発的生徒指導の展開が必要であると考えられる。

## (2) これから求められる生徒指導

いじめや不登校など学校の抱える課題に対して早期発見・早期対応の重要性が増している現在、従来の生徒指導を漫然と継続していくだけでは、課題の解決を図ることは困難である。新井(2017)は問題行動が多様化、重層化、不視化する中で、これから求められる生徒指導を次のように示している。

- ・すべての児童生徒が問題行動の要因を内包している可能性があるという認識をもつ
  - ・学校種間の情報連携や行動連携
  - ・生徒指導と特別支援教育の協働
  - ・問題対応型の生徒指導から開発的・予防的生徒指導への転換
  - ・学習指導と生徒指導の一体化
  - ・すべての教師が生徒指導を担う
- これらの内容を踏まえ、本研究では第1次支援(開発的生徒指導)を主眼に、生徒指導の三つの機能である「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」「自己決定の場を与える」の視点から、これまで実践してきた指導内容や指導方法を見直し、自己指導能力の育成を目指した具体的な指導の方策を立案、実践、検証していくこととした(図1)。

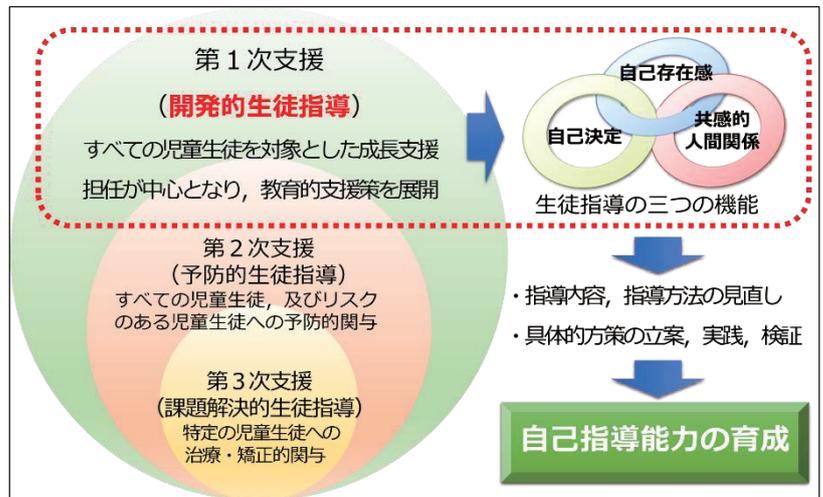


図1 本研究における階層的支援構造と自己指導能力の関係

これまで実践してきた指導内容や指導方法を見直し、自己指導能力の育成を目指した具体的な指導の方策を立案、実践、検証していくこととした(図1)。

## (3) 自己指導能力の育成を通じた組織マネジメントの有用性

OECD(2015)によれば、非認知的スキルと認知的スキルの発達は相互に関連していることが示されているが、学校では従来、自己指導能力の育成を目指して教育課程を立案し、教育活動が展開されてきた。しかし、学力低下に対する懸念や生徒指導に関する課題が複雑化・深刻化する中、これまで取り組んできた生徒指導の三つの機能に基づいた働き掛けを再検討しながら、指導体制や指導方法の在り方を見直す必要がある。学校教育目標の具現化に向けては全職員による課題の共有と実践が必須であるが、大量採用が進む昨今、若手教員の資質・指導力の向上が強く求められる。ミドルリーダーとの協働実践を通じた指導技術の継承、ピアメンターの役割を担うことによる職責への自覚や責任感の醸成を図りながら、学校運営に主体的に参画する姿勢を養っていくことが重要であると考えられる。

## (4) 自己指導能力の育成に向けた教職員の体制整備

自己指導能力を育む指導をはじめ、充実した生徒指導を展開していくためには、各教職員のスキルアップが不可欠である。SWOT分析等によるビジョンの共有のもと、教員集団が相互に学び合う「チーム学習」を推進させていく必要がある。そして、学校課題に向き合う際、対応のみに止まらず「自立的な学びの機会」と捉える視点や意識を持つことにより、互いに学び合い高め合う「学習する組織」が形作られ、コンプリヘンシブ・アプローチによる学校教育目標の実現につながるものと考えられる(図2)。

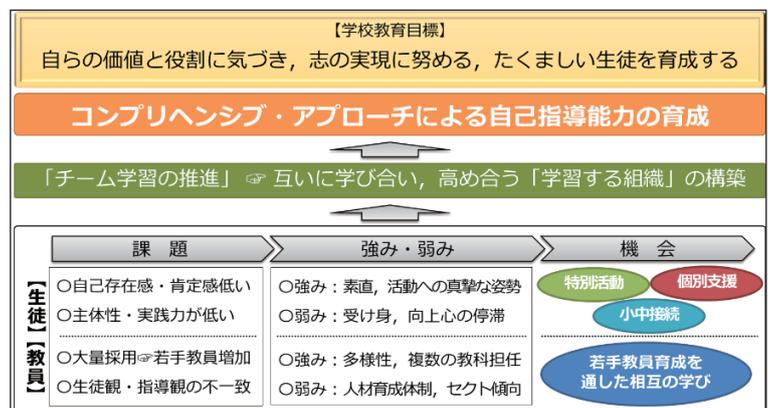


図2 ビジョンの共有による学習する組織の構築

## 2 コンプリヘンシブ・アプローチの活用

### (1) コンプリヘンシブ・アプローチとは

コンプリヘンシブ・アプローチは、学校の課題や葛藤を改善の視点と捉え直し、各生徒の現状に即した指導・支援により課題の解決を図る生徒指導モデルであり、以下に示した2つを柱とした多面的・包括的な構成である。

#### ①生徒間・活動間の相乗効果を目指すビジョンの共有について

各生徒の自己指導能力には差異があることを踏まえ、「主体性を発揮する場」や「協働的な活動」などの場面を意図的に設定し、他者との関係構築や肯定的他者理解による協調性・協働性の向上を見据えた働き掛けである(図3)。自己指導能力の高い生徒がリーダーシップを発揮して行事に取り組み、共に活動することで中間層の生徒を引き上げたり、手厚い支援が必要な生徒が前向きに活動に取り組んだりすることで学級生活が更に向上するといった、生徒相互の相乗効果が期待される。また、特別活動における生徒間の協議で身に付けた話し合いのスキルを教科授業の「共同的な学びの構築」に活かしたり、音楽の授業で培ったスキルを合唱コンクールに活かしたりするなど、各活動間による相乗効果も期待される。

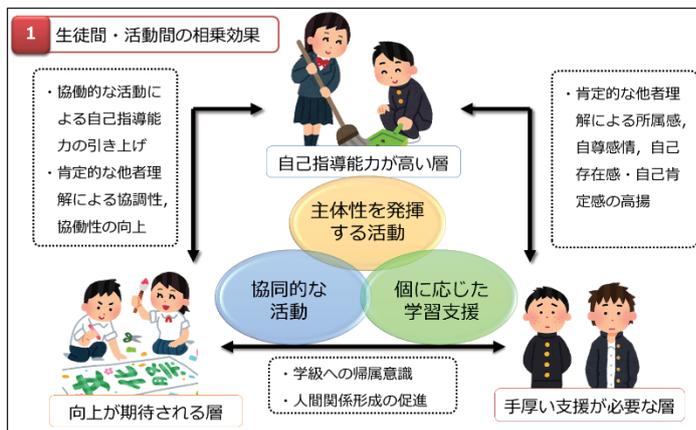


図3 生徒間・活動間による相乗効果のイメージ

#### ②教職員間の連携と相互成長のための仕組みづくりについて

コンプリヘンシブ・アプローチを効果的に実践するためには、教員間の連携が不可欠であり、日常の業務を通じた学びが土台となる。管理職によるマネジメントのもと、若手の教員には、各学校に毎年のように配属される初任者のピアメンターとしての役割や、ミドルリーダーとの協働による最前線での取組が求められる。このように職責の遂行を通して、指導技術の継承や主体性・責任感の醸成を図ることにより、若手教員の資質や指導力の向上が期待される。一方で、ミドルリーダーは若手教員の強みを生かすための働き掛けを工夫したり、初任者はピアメンターである若手教員の取組を参考にして指導に生かしたりする双方向の学びを得るなど、好循環につながるものとする(図4)。

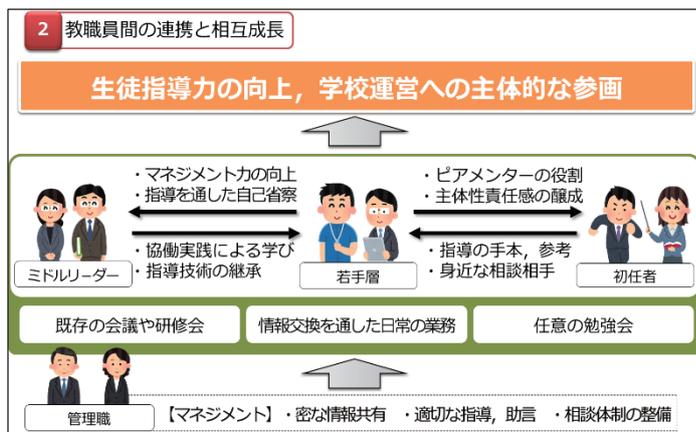


図4 教員間の連携による相互成長のイメージ

### (2) 事例校におけるコンプリヘンシブ・アプローチの展開と生徒の変容

#### ①特別活動における生徒指導の三つの機能の充実…資料1-1, 資料1-2

合唱コンクールや係活動において、自己評価とフィードバックを通して次の機会でも更なる向上を目指した活動の改善・充実を図った。生徒主導を念頭に生徒が自己の取組や学級の状況を省察し、他者との協働を通して主体的に活動に取り組めるよう、学級担任や学年主任、担当教員の共通理解の下、指導計画や具体的な手立てを立案、実践した。合唱コンクールでリーダーシップを発揮した生徒を中心として、教師の指示がなくても意見交換しながら具体策を提案するなど主体的な姿が見られた。また、班の話し合いや全体での共有において、各々の取組を認め賞賛することで、自己存在感の醸成につながった。合唱コンクールへの取組がこの活動に好影響を与えたことは明らかであり、各活動の関連を図りながら計画的な指導を実践していくことの重要性を再認識した。

②別室登校生徒の自己指導能力を高めるための授業を通した支援…資料2

生徒の自己指導能力の育成に向けては、通常登校している生徒に限らず全生徒を対象とした指導が求められる。事例校では、個別の配慮を要する（不登校・別室登校）生徒に対し、スクールカウンセラーや町の適応支援教室などと連携してそれぞれの生徒に応じた段階的な指導・支援を行っており、一連の取組を図5に整理した。

本実践では、登校はしているものの、教室には入れず別室で学習を行っている生徒への支援に重点を置き、技術科「加工に関する技術」の授業において教室の整理整頓に必要な小物入れや本棚などを製作する学習に取り組んだ（図6）。主体的な課題設定を促し、製作の過程では適切な助言と取組への賞賛が学習意欲の向上につながり、完成時には大きな達成感を得ると同時に、新たな課題の設定など前向きな姿勢が見られた。担任から学級での活用状況やクラスメイトの様子などのフィードバックを受け、学級への所属感やクラスメイトとのつながりを再認識させることができた。また、本実践後、担任からの働き掛けによって数人のクラスメイトが当該生徒に給食やプリント類を届けることが常態化し、その際に短時間ながら会話を交わすことで人間関係形成が深まりつつある。まだ教室で授業を受けるまでには至っていないが、総合的な学習の時間で行われた「野外体験学習」に部分的に参加するなどの行動変容が見られ、本実践が当該生徒の自己存在感を高めて自己決定を助長し、クラスメイトとの共感的人間関係の構築に向けた契機になったと考える。

<b>不登校</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実態把握 … 小学校との情報共有，ケース会議，養護教諭・SSW・支援員等の連携</li> <li>・保護者との連携 … 生活習慣の確立，学習機会の創出に向けた支援等</li> <li>・家庭訪問による関係構築 … 肯定的理解，個に応じた学習課題と適切な登校刺激</li> </ul>
<b>別室登校</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係機関との連携 … 適応支援教室の活用（町教委との連携）</li> <li>・指導態勢の構築 … 個々のカリキュラム，教育相談担当・学年部・支援員との連携</li> <li>・教室復帰へ向けて … 生徒の自己決定を促す，受け入れ準備（学級生徒の理解）</li> </ul>
<b>教室復帰</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境整備 … 座席配置，グループ編成や係活動への配慮</li> <li>・経過観察 … 教科担任との情報交換，意図的なチャンス相談（認める，賞賛する）</li> <li>・目標の設定 … 学校生活（学習面・生活面）の明確な短期目標の設定と実践の支援</li> </ul>

図5 個別の配慮を要する生徒への段階的な指導・支援

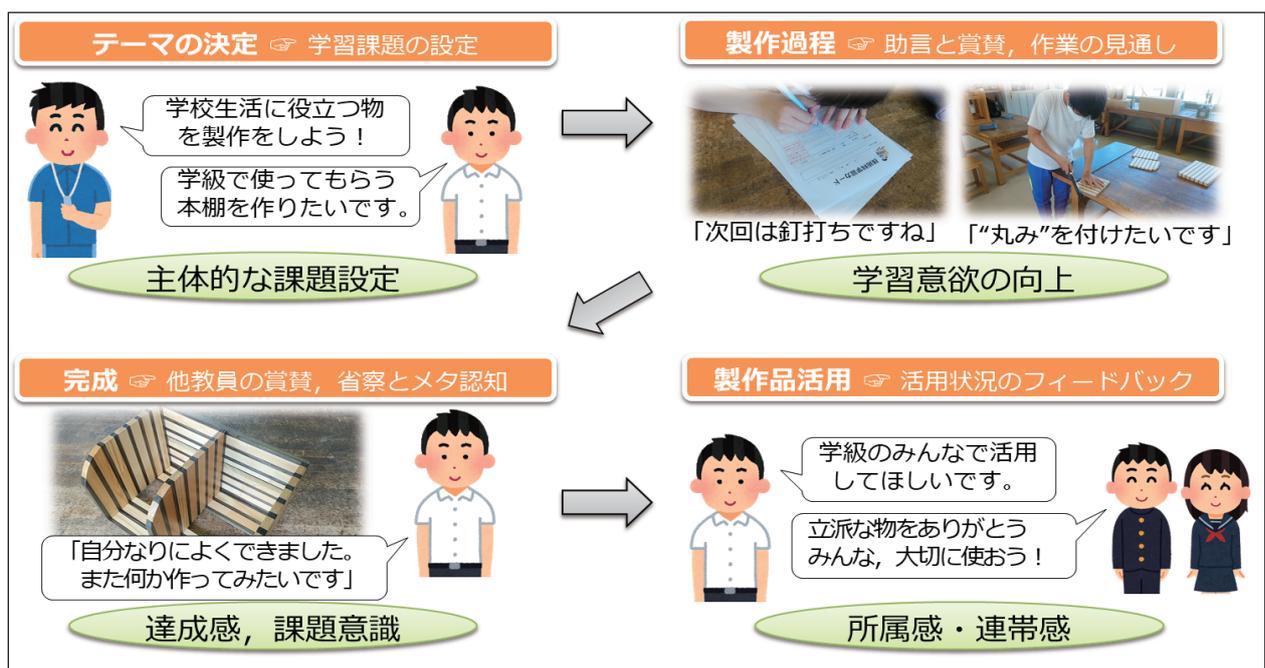


図6 個別の配慮を要する生徒への支援

③円滑な小中接続の追究に向けた入学予定者対象の学習会・・・資料3

自己指導能力の育成に向けては、中学校3年間、あるいは小中学校9年間を通した長期的な働き掛けが必要であり、円滑な中学校生活への移行は重要なポイントである。その一取組として「児童が抱えている不安や疑問の解消」「入学後の学習や諸活動に対する意欲付け」「入学前に児童の様子を把握して入学後の指導に生かす」ことをねらいとした入学予定者対象の学習会を実施し、期待される効果と課題点など小中接続の在り方について考察した。児童の様子や感想、指導者間でのリフレクションから、中学校の学習や雰囲気をもより深く実感させるためには“見学から体験へのシフト”の必要性が明らかとなった。一方で、学校全体の取組として実施する場合には、時期や内容、担当者の選定などのマネジメントが必要であり、教職員間ではもとより小学校との密な連携を踏まえ学校の実態に応じた取組が内容の充実につながるものと考えられる。

なお、本実践に参加した児童は中学校入学後、授業をはじめとした諸活動に円滑に適応することができており、各種委員に立候補するなど意欲的な姿勢が見られている。また、発達障害傾向にある児童も学習会に参加しており、事前に実態把握ができたことで入学後すぐに適切な支援が可能となり、大きなトラブルもなく学校生活を送ることができている。

(3) 自己指導能力の育成に向けた教員間の学び合いと有効性の検証

本実践に関わった教員の聞き取り(図7)から、自己指導能力の育成に向けた教職員間の学び合いに求められるポイントを以下にまとめた。

①若手教員育成におけるピアメンターの有効性について

自己指導能力の育成に向けた取組について、若手の教員と定期的なリフレクションを通した勉強会を行った。初任者は、同学年4年目教員をロールモデルとして、その取組を大いに参考にして指導にあたった。一方で、4年目の教員はピアメンターとしての役割を通して、自己省察を深めて指導の改善を図ることや職責の重さを再認識するなど、双方向における効果が明らかとなった。初任者に対しては、学年主任や教科主任などミドル層からの指導・支援が基本となるが、年齢が近く、同様の立場や視点を持つピアメンターには悩みや不安を率直に打ち明けやすく、そのアドバイスや実践内容は初任者にとって手本となる重要な存在である。人材育成の観点から、校務分掌への位置付けなどマネジメントの必要性が高いと考える。

②ミドルリーダーとの連携・協働による指導力の向上について

ミドル層の教員は、各実践を進めるにあたり、指導力向上に向けて組織として取り組んでいくことに着目していた。共に実践に取り組む中で若手教員の特性や課題を把握し、課題を互いに補充し合いながら各自が強みを発揮できる働き掛けの必要性を実感していた。これは、学校教育目標の具現化に向けた「チーム学校」の構築など、組織マネジメントに向けてなくてはならない視点であり、管理職をはじめ全職員で継続的に追究していくことが重要である。

 <p>若手層H教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場合によっては、教師からの指示よりリーダー的な生徒から声掛けを行うことで他生徒への響き方が違うと感じた。<b>生徒を上手く動かすことが重要。</b></li> <li>・各生徒に<b>役割を与えて期待、賞賛</b>することで、生徒はそれに応え責任を果たそうとする。「<b>適切な仕掛け</b>」「<b>待つこと</b>」が生徒の成長につながる。</li> <li>・<b>ピアメンターの役割</b>を意識しながら日々の指導にあたった。自分の取組が初任者のモデルや参考になるという<b>責任の重さ</b>を感じた。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・1学期は無我夢中であったが、H教諭を<b>ロールモデル</b>にした。何事も丁寧に対応してもらい、安心して日々の指導に取り組むことができた。</li> <li>・気になる生徒の様子について注意深く観察した。得意教科での取組や清掃に励む姿など、見えなかった一面に気づいた。<b>多くの視点から多面的に見ることが生徒理解の基本</b>であることを認識した。</li> <li>・一人で悩んでも解決は遠い。<b>積極的に相談して助言</b>をもらうことが大切。</li> </ul>	 <p>初任者K教諭</p>
 <p>ミドル層I教諭</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初任者や若手教員への指導を通して、手立て(ノウハウ)に止まらず<b>指導の背景やねらいを理論化</b>することで、自己の学びにつながった。</li> <li>・ともに指導にあたることで各教員の特性や強みが見える。弱点は<b>補充</b>し合い、各人の<b>強みを発揮させる働き掛け</b>を継続的に追求していきたい。</li> <li>・この実践を<b>教科指導において活用</b>していくことが必要。<b>教科の壁を越えた「共同での授業づくり」</b>など、<b>校内研究と関連</b>させて追究していきたい。</li> </ul>

図7 本実践を通した教員の学び

### Ⅲ 研究成果の学校教育における位置付け・意義，応用性，期待

本実践を通じた生徒の変容を表 1 に整理した。各活動に取り組む中で、生徒同士の相乗効果による成長につながると同時に、前回の活動が次の活動に好影響を与えるなど活動間による効果も見られた。また、実践前後の 6 月・12 月に生徒の意識調査を実施した結果、各設問において肯定的回答の割合が増加しており、行動だけではなく生徒の意識においても変容が確認された（図 8）。これらを踏まえ、本実践からコンプリヘンシブ・アプローチによる生徒指導は、生徒の活動への主体的な取組を促すとともに、各教員の指導力の向上と組織的な指導に寄与するものとする。今後、コンプリヘンシブ・アプローチを教科指導において活用していくことが必要であり、教科の壁を越えた「共同での授業づくり」の実践など、校内研究と関連させて追究していくことで学力の向上に資することが期待される。

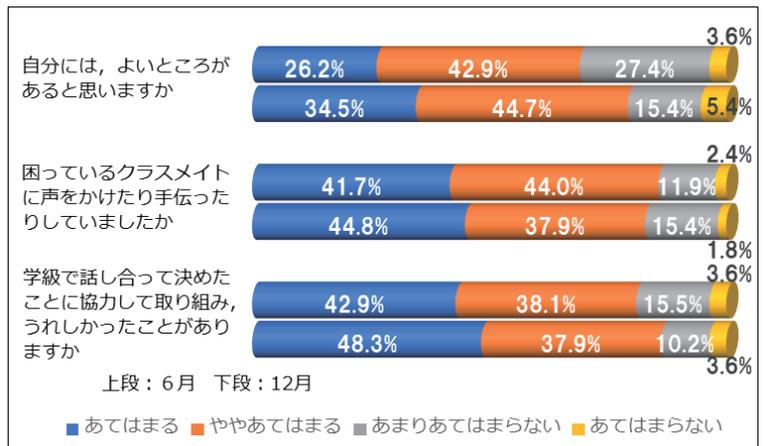


図 8 意識調査結果（中学校 1 学年，2 学級）

今後、コンプリヘンシブ・アプローチを教科指導において活用していくことが必要であり、教科の壁を越えた「共同での授業づくり」の実践など、校内研究と関連させて追究していくことで学力の向上に資することが期待される。

表 1 本実践により認められた生徒の変容

自己指導能力の差異	認められた行動の変容
自己指導能力の高い層の生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自他のメタ認知と話し合い活動における主体的な姿勢</li> <li>・各種活動時におけるリーダーシップの発揮</li> </ul>
自己指導能力の向上が期待される層の生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リーダーとの活動を通じた協働性・協調性の向上</li> <li>・別室登校生徒との関わりによる肯定的な他者理解</li> </ul>
自己指導能力の育成に向けて手厚い支援が必要な層の生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業を通じた個別の支援による学習意欲の向上</li> <li>・自己存在感の醸成と学級への所属感の向上</li> </ul>

### Ⅳ 引用・参考文献

- ・新井肇（2017）「生徒指導」独立行政法人教職員支援機構『生徒指導：校内研修シリーズ 13』（<https://www.nits.go.jp/materials/intramural/013.html>）
- ・井上浩史（2020）「今、教師と学校に求められていること－生徒指導の観点で考える力のある教師・学校とは－」『同志社大学教職課程年報』第 9 号，pp.80-84
- ・川上彰久（2016）「生徒指導の機能を活かした学校マネジメントに関する実践研究」『帝京科学大学教職指導研究』第 1 号，p.100
- ・国立教育政策研究所（2015）『生徒指導リーフ「教育的予防」と「治療的予防」』
- ・久保田愛子（2020）「生徒指導の機能と自己決定理論との接点を探る」『宇都宮大学教育学部研究紀要』第 70 号，pp.39-40
- ・京都市中学校生徒指導研究会（2017）『あゆみと研究』
- ・宮城県教育委員会（2018）『みやぎの教員に求められる資質能力』
- ・文部科学省（2010）『生徒指導提要』
- ・OECD（2015）『家庭，学校，地域社会における社会情動的スキルの育成』（<http://www.oecd.org/education/ceeri/FosteringSocialAndEmotionalSkillsJAPANESE.pdf>）
- ・ピーター・M・センゲ（2011）『学習する組織』英治出版
- ・坂本昇一（1990）『生徒指導の機能と方法』文教書院
- ・滝充（2002）「生徒指導の理念と方法を考える－生徒指導モデルと事後治療的・予防治療的・予防的アプローチ－」『生徒指導学研究』創刊号，pp.76-85

## 合唱コンクールを通した一連の活動

## 1 ねらい

学級担任との協議を通して、生徒指導の三つの機能の視点に基づいた詳細な指導計画の立案と目指す生徒の姿を明確にしながらか活動の改善・充実を図ることによって自己指導能力の育成を目指す。

## 2 実践計画

段階	活動内容（場の設定）	時期	指導・支援	目指す生徒の姿
準備	・以前の合唱コンクールのビデオ鑑賞	9月 月上旬 1時間	・昨年度までの取組を振り返り、自分達の学級（自分）はどのように取り組んでいきたいのか考えさせる。	・練習や本番への意欲を高め、よりよい合唱にしようと考えている。
話し合い	・学級、自分の目標の設定 ・学級の約束を決める ・練習計画を立てる	9月 中旬 1時間	・目標は分かりやすく覚えやすいものにするよう助言する。 ・約束事はより具体的な内容にするよう助言する。	・自分の事として主体的に話し合いに参加している。 ・他者の意見を聞き入れ、よりよい案を立てようとしている。
実践	・合唱コンクールの練習	9月 中旬 ～	・決定事項を教室内に掲示し、自主的に練習に取り組めるよう支援する。	・自己目標や話し合いの決定事項に従って、協力しながら練習や発表に取り組んでいる。 ・ワークシートを活用し、自己評価と他者（生徒・教員）からの肯定的な評価を受ける機会を設定する。
	・他学級との歌い合い ・学年リハーサル	10月 月上旬	・现阶段のベストを促し、反省を本番に生かせるよう助言と激励をする。	
	・合唱コンクール	当日	・これまでの練習を振り返り、目的を持って参加できるよう助言する。	
振り返り	・事前、事後を含めた合唱コンクールへの取組を通して学んだことを言語化し、次の活動への意欲を高める	後日	・自分の努力や学級の団結が深まったことを評価し、仲間や協力してくれた人達に感謝の気持ちを持てるよう助言する。	・事前、事後を含めた合唱コンクールへの取組を通して学んだことを明確にして、今後の生活や活動への意欲が向上している。

## 3 実践を通した検証

## CASE 1 意欲向上を図るための学級全体への働き掛け①

練習をはじめ前に、数人の振り返りカードに記入された内容を紹介した。「みんなで取り組むことが楽しい」「昨日の反省点を改善したい」などの個々の思いや抱負を全体で共有し、自分の取組を振り返らせるとともに意欲の向上を図った。普段、積極的に自分の意見を主張しない生徒は全体の前で肯定されることにより、活動前より自信を持って取り組めるようになった。【自己存在感を与える・自己決定の場を与える】

## CASE 2 意欲向上を図るための学級全体への働き掛け②

生徒達が設定した目標が教師の求めるものよりも低いものであった。より高い目標を設定させるため、教員間の連携のもと他クラスのリハーサルや上級生の練習を見学させ、意欲付けを図った。特に、上級生の練習に対する熱意や互いに声を掛け合う姿勢に大きな影響を受け、自発的にアドバイスしあうなど自分たちの合唱の質を高めようとする態度が見られるようになった。【自己決定の場を与える】

## CASE 3 生徒間の協働を高めるための働き掛け

パート練習の際に、意欲の低い生徒（合唱が苦手）とリーダー的な生徒を意図的に同グループで活動させた。意欲的ではなかった生徒は、技術的な助言や励ましを受けて、しだいに前向きに活動に取り組むようになり、表情も変わってきた様子が見られた。リーダー的な生徒は、「他者のよい点や努力を認める」ことを通して、他者理解に関する視野が広がりとつとあると感じた。【共感的な人間関係を育む】

## CASE 4 自己指導能力が高い生徒、中間層の生徒への働き掛け

毎回の練習後に実行委員、指揮者、伴奏者、パートリーダーのコアメンバーを集め、取組を進める中で意見交換や課題の解決に向けて話し合う機会を設定した。今後の練習の方向性について合意形成を図ることや他パートの意欲の低い生徒へ進んで声掛けをするなど、小さいながらも変化が見られた。また、話し合いの中で教師が生徒の意見を尊重して認めるとともに「任せる旨」を伝え、主体的な取り組みを促した。生徒は、責任感を高めるとともにリーダーシップを発揮しながら活動に取り組んでいた。生徒主導による取組のきっかけとなり、ほとんどの生徒がリーダーの声掛けに呼応して前向きに練習に取り組んでいた。

【自己決定の場を与える・共感的人間関係を育む】

## CASE 5 自己指導能力が低い生徒への働きかけ（支援）

合唱が苦手な協力的な姿勢に欠ける生徒に対して、目標掲示物（クラスでの話し合いで決めた合唱コンクールへ向けたスローガン）の作成を依頼した。学級のために貢献する（力を発揮する）機会を設定して活動への参加を促すとともに、クラスメイトや教師から賞賛を受けることで、満足感や達成感を味わうことができていた。

【自己存在感を与える】

## 係活動のバージョンアップを通じた学級組織の改善

## 1 ねらい

自分の取組と学級全体の状況を省察して活動の効率化を図るとともに、自己の生かし方や実践法、友人のよさに気づき、学級生活の向上につながる係活動を模索しながら、学級の独自性や所属感を高めることを目指す。

## 2 学級活動での話し合い（指導過程）

段階	活動内容	▼指導上の留意点 ○教師の支援	資料など
導入	1 あいさつ	▼調査の集計プリントや模造紙にまとめて明確に提示し、一人一人の課題意識を高めるようにする。 ○提案事項・活動の目的をつかみ自分や学級の課題として捉えられるように支援する。	集計プリント 拡大コピー
	2 提案理由の説明		
展開	3 班による協議	▼係の活動がどのように評価されているかを確認し、よかった点と問題点をつかませる。 ○話し合いに進んで取り組み、議題について自分の意見を述べられるような雰囲気づくりに努める。	観察
	①活動のよかった点・頑張った点	○他者の意見を尊重させ、自他の折り合いを付けながら実践を見通した解決方法を考えさせる。	
	②係活動の工夫・改善点		
	例) 2種類ある仕事を週ごとに交代しながら取り組む		
③新設や統廃合が必要な係の提案	▼1学期(あるいは前期)の活動の反省や話し合いから学級生活の向上と協働して取り組むことができる係を考えさせる。		
例) 『整頓係』: 学級文庫や棚など、掃除以外にも整頓し使いやすく美化にもなる			
4 班ごとの発表	○話し合いから決定したことをまとめ、発表・記録させる。		
終結	5 自己・相互評価	▼話し合いの結果を踏まえて、協力して係活動に取り組む意欲を喚起させ、学級の自治活動に自信をもってあたるよう支援する。 ▼話し合いでの司会進行や意見について評価し、生徒の取組を賞賛することで、話し合いに意欲的に参加する姿勢を養う。	観察
	6 教師の話		

## 3 実践を通じた検証

## (1) 生徒の話し合いの様子について

## ①自己や学級全体の日常の取組について深く省察することができていたか？

- ・ワークシートの活用により、自分の考えを整理して班の中で意見交換ができていた。
- ・教師側の予想以上に生徒が自分たちの活動を分析し、新たな提案をすることができていた。
- ・個人で考えた後、教師の指示がなくても意見交換しながら協議するなど、主体的に議論する形になっていた。  
☞「自己の取組の省察→他者の取組の省察→クラスのためのよりよい活動」の流れがスムーズで、集中してワークシートに記入し活発に話し合う活動ができていた。

## ②他者の取組を肯定して認めることができていたか？

- ・教科の授業連絡など活動頻度が多い係だけではなく、目立たない係の活動にも触れて賞賛する生徒も多くおり、生徒が他者の活動をよく見ていることが分かった。
- ・他者の取組が自己の学校生活にもたらす影響(役立っていること、助かっていること、効率的になっていること等)について再認識する機会となっていた。
- ・各班の話し合いや全体での共有において、各係の取組を認め賞賛することで、生徒の自己存在感の醸成が図られていたと感じる。

## ③改善に向けた協同的な話し合いを行い、建設的な意見を示すことができたか？

- ・肯定的な評価と並行して改善点も挙げ、「明日の授業について昼休みのうちに聞くことを徹底する」「複数人で行っている係は曜日を決めて担当する」など、課題解決のためにはどのように取り組んでいくべきかについて具体的な提案をした生徒が多かった。
- ・8割程度の生徒が学級生活をよりよくするための具体的な案を示すことができた。

## (2) 教員の働き掛けについて

## ①自己省察を深めさせることができていたか、またその要因は？

- ・係活動は、毎日あるいは頻繁に取り組んでいる身近なテーマであったため、生徒は迷いや抵抗がなく自然に省察できたものと思われる。
- ・個々の意見や班で話し合った意見を全体で共有した。生徒の賞賛によるエンパワメント、改善点の提示による助言などを受け、各自が改善に向けた材料としながら実践に取り組むよう促した。☞他生徒からの評価は、場合によって教師の注意や声掛けよりも影響が大きい。

## ②生徒の積極的な話し合いを促すことができていたか、またその要因は？

- ・ワークシートの構成が適切であり、生徒が自分の考えを整理しやすく、主体的な意見交換を促すことにつながっていたと考える。
- ・「誰が、何人で、どの活動に取り組んでいるか」などを把握させるため、ワークシートに「係活動一覧表」を添えて学級の係活動の全容を示した。各生徒にすべての係活動を俯瞰させたことで、スムーズで活発な話し合いを促すことにつながった。

## 資料2 個別の配慮を要する生徒への授業を通じた適応支援

### 1 取組の概要と実践計画

#### (1) 概要

技術科「加工の技術」の授業を通して、教室の整理整頓に必要な小物入れや本棚など学級全体に資する作品を製作する。学級やクラスメイトとのつながりを意識させることや、やりがいをもって取り組ませることで、人間関係形成を助長するとともに学習への意欲喚起をねらいとしている。

#### (2) 実践計画

段階	内容	留意事項等
1	指導計画の立案	管理職，教育相談担当，学年主任，学級担任との密な情報共有・指導体制を構築し，指導計画を立案する
2	学習への意欲付け	生徒の実態を把握し，授業のオリエンテーションを実施しながらレポートの構築を図る
3	製作テーマの決定	担任と連携しながら，生徒の主体的な取組を促す
4	製作	生徒の実態（登校状況・学習への意欲や集中力など）に対応しながら，適宜支援指導を施していく
5	製作過程	担任や支援員と密に情報を共有しながら，肯定的評価や賞賛を与える
6	完成	取組を認めて賞賛しながらこれまでの経過を省察させる（自信を持たせる，学級構成員の自覚など）
7	作品の活用	作品を学級担任へ贈り，担任から概要を説明して所属学級で利用してもらう

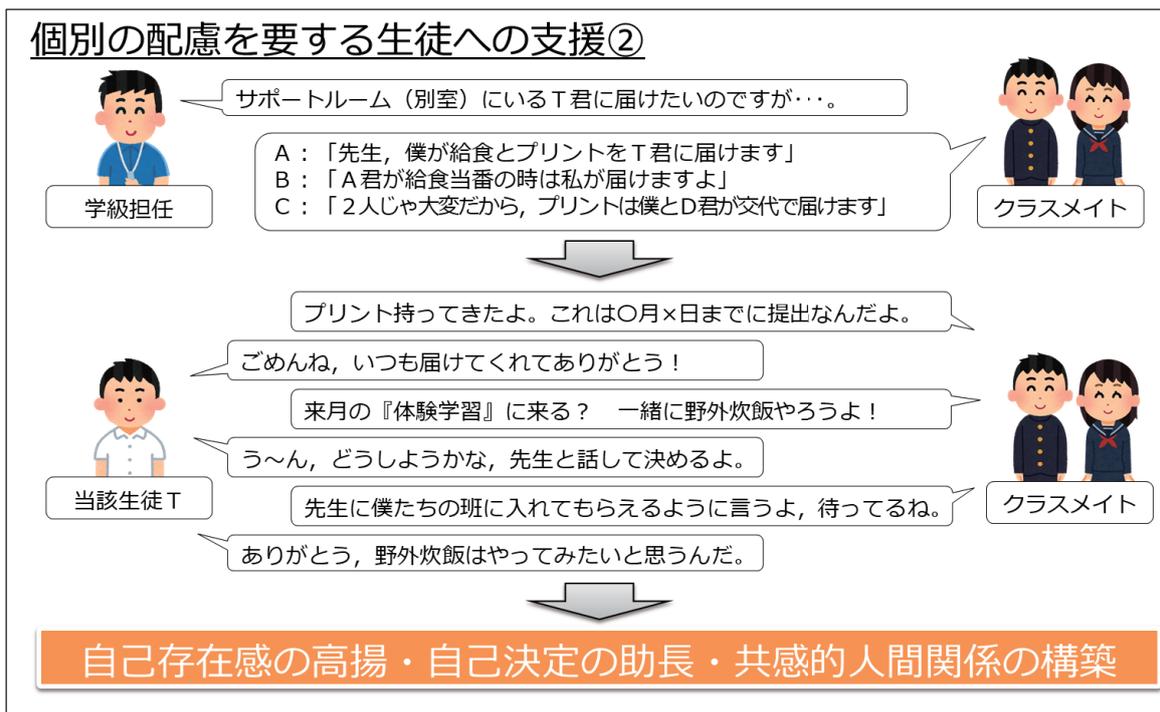
### 2 実践を通じた検証

#### (1) 当該生徒の授業への取組について

- ・本実践における技術科の授業は週1～2回，全12時間で実施した。授業者の都合や学校行事などによって固定的に実施することはできず，「次回は，来週○曜日の□時間目」のように流動的な実施だったが，当該生徒は欠席することなく全時間に参加することができた。
- ・振り返りカードや授業への活動の様子（資料）から，製作実習に興味を持って意欲的に取り組んでいる姿が認められた。
- ・年度はじめは学年・学級との関わりがほとんど見られなかったが，夏休み以降は「校外体験学習」に参加してクラスメイトと一緒に活動に取り組むなど，前向きな姿勢が出てきた。

#### (2) 授業後の働き掛けと今後の指導について

本実践後担任からの働き掛けにより，当該生徒T並びに数名のクラスメイトの行動変容が認められた（下図）。本実践が「生徒の自己存在感の高揚」や「生徒間の人間関係形成の助長」に一定の効果があったものとする。今後の指導・支援に向けては，実践を通じたTの心情や意欲の変化，学級生徒のTへの向き合い方や接し方などについての的確にアセスメントを行う必要がある。その内容に応じて，次の手立てを講じて継続的に実践していくことで，より相互の自己指導能力の向上につながるものとする。



### 資料3

## 入学予定者対象の学習会を通じた小中接続の追究

### 1 ねらい

- ・児童が抱えている不安や疑問の解消と入学後の学習や諸活動に対する意欲付けを図る。
- ・児童が中学校の校舎や施設での学習を通して、円滑な中学校生活への移行の一助とする。
- ・入学前に児童の様子を把握することで、中学校入学後の指導に生かす。

### 2 概要

- (1) 日時・場所 令和元年12月21日(土) 8:00~12:00 X町立X中学校  
(2) 指導者 X中学校教諭、宮城教育大学教職大学院生

### 3 授業内容

#### (1) 1時間目「技術」

本時は「情報に関する技術」と「加工に関する技術」に基づき、児童の興味関心に応じた授業をねらいとして実施した。体験型授業を主眼とし、「情報に関する技術」の概念や説明などは割愛して実習を中心とした授業構成を図った。コンピュータを利用してオリジナルストラップの製作に取り組む内容で、詳細は以下の通りである。

- ・ソフトウェアを起動し、自分の好きなデフォルトを選択する。(ソフトウェアの機能)
- ・各ツールを使い自分のアイデアを生かして台紙を作製する。(マウス・キーボードの使い方)
- ・はがきサイズの光沢紙に印刷する(プリンタの設定)
- ・切り取ってホルダーに貼り付け、カバーを付けて完成(金属やプラスチックの性質)

児童は、総合学習やプログラミングの授業においてコンピュータの使用に慣れており、キーボードやマウスの操作、ソフトウェアのツール操作などで、簡便な説明でも迷うことなく作業に取り組むことができていた。また、自分の考え(アイデア)を素直に表現しながら製作に取り組む様子が印象的だった。授業の最後に授業者より、教員の視点から中学校で「技術を学ぶ意義」や「授業に取り組む際のポイント」に関する内容を話し、興味・関心を持たせるとともに意欲の喚起を図った。生徒の表情や感想から、ねらいに迫ることができた授業であったと考える。

#### (2) 2時間目「英語」

授業者は10年程度のキャリアで、前任校では小学校に出向いての出前授業を行っていた。その経験を生かし、アイスブレイキングを取り入れながら和やかな雰囲気の中で授業が進められた。また、ICT機器や表示カードなどを活用しながら視覚に訴えることや“書くこと”を極力抑えた授業構成により、児童の興味と集中力が損なわれないよう配慮されていた。大まかな内容は次の通りである。

- ・ディスプレイに簡単な掛け算をフラッシュカードのように表示し、他者と競争しながら英語で答える活動
- ・中学校の部活動をテーマとして、カードをヒントとして教師の質問に回答する活動
- ・ディスプレイを活用したアルファベットの確認
- ・英単語の発音のコツ 例) X:「くす」、F:「っふ」など
- ・学習プリント(ワード探し、短文の書き取りなど)

授業者の明るく元気な問いかけに呼応して、大きな声で答える姿が見られた。児童によって得手不得手はあるものの、積極的に英語を話そうとすることは英語科で求められる生徒の姿であり、小学校における外国語活動で身に付けた姿勢を継続して中学校の英語で生かすことが重要であると考える。

#### (3) 3時間目「数学」

中学校で最初に学習する単元「正負の数」の授業をミニ体験することを目的に授業を展開した。温度計や標高を例にして、プラスとマイナスの概念を理解することから始まり、「符号・正負の数・自然数」などの用語の確認、簡単な計算問題に取り組んだ。授業者は大学院生であり、本授業を学修の一環と捉え指導案を作成して授業を行った。マイナスの概念を説明する際に、温度計(上がプラスで下がマイナス)を取り上げ、それを右に90度回転させることにより、小学校で履修済みの数直線(右側がプラスで左側がマイナス)として見るなどの工夫によって、児童の理解がより深まったように感じられた。授業の最後に、授業者より「問題が分かった時の気持ちよさ」「日常生活での活用」などについて、数学科の視点から説明した。中学校の現状では、特に数学での“つまずき”が発端となって学習全体への意欲が減退してしまうことが多くある。児童が事前に中学校の学習に触れることで、心構えや準備にあたって大きな効果が期待されると考える。なお、児童の疲労や集中力の持続等を考慮し、30分間の授業として実施した。



授業の様子(英語科)

### 4 本実践のねらいの達成と有用性の検証について(授業者、参観者のリフレクションから)

- ・授業内容を精選して工夫を施すことにより、児童に対して中学校生活への期待を持たせる効果が高まり、中1ギャップの解消を図る取組になると考えられる。
- ・授業や休憩時間の会話を通して、児童の性格や考え方に触れることができたと感じた。中学校としては、入学前に児童を直に見ることで適切な実態把握につながるものと考えられる。(引き継ぎ文書だけでは、的確な実態把握につながらないこともある。)
- ・児童にとって事前に知っている教員がいることで、安心感を持つことにつながるのではないかと感じた。
- ・新たな授業(英語や数学など)に触れることで、児童の不安解消を図り入学後の学習に対する意欲の向上につながると感じた。
- ・児童の事後アンケートにおいて、「楽しかった」や「基本を知ることができた」などの回答が多く挙げられたことから、十分にねらいに迫ることができたと考えられる。
- ・今回は少人数の参加であったが、前述の成果から入学予定生徒全員を対象として学校行事に位置付けることの必要性を感じた。事例校では、11月下旬に行われる学校見学会で児童が授業や部活動を参観する機会を設定しているが、授業を受けることで更に効果が高まるものと考えられる。